

大阪中之島美術館準備室 学芸業務研修についての報告書

大阪中之島美術館準備室 学芸業務研修オリエンテーション
外部研修生 眞銅彩香

はじめに

今回、私がこの研修に参加しようと思った理由は 3 回生になって芸術ゼミに入り学んでいくうちに現代の美術について学びたいと考えるようになり、その現代の美術を代表するものとしてグラフィックデザインがあることを知ったからだ。また、様々なアート作品に日々触れることのできる学芸員という職業にも興味を持っていたため、今回のインターンに参加するに至った。

研修日程

2019 年 7 月 30 日(火)13 時～16 時

8 月 1 日(木)9 時 30 分～11 時 45 分/13 時～16 時

8 月 2 日(金)9 時 30 分～11 時 45 分/13 時～16 時

8 月 5 日(月)9 時 30 分～11 時 45 分

研修内容

研修内容は、大阪中之島美術館が所蔵する近現代グラフィック作品の調査及び保管にかかる実務研修である。数多くの近現代グラフィック作品が大阪中之島美術館準備室でどのように管理されているのか、美術館に展示する貴重な作品をどのような工夫を施して保管しているのかを研修を通して学んだ。

1 日目の研修では講義形式では、グラフィック資料が大阪中之島美術館準備室に、どのように収蔵されているのか。そもそもグラフィックデザインとは何か、その種類や数について学んだ。グラフィックデザインには、リトグラフという版画の一種である平版版画が用いられる。リトグラフを誕生させたアロイス・ゼネフェルダーの意外な発明に至った経緯なども教えていただいた。

研修 2 日目からの実務研修では、グラフィックアーティストである早川良雄の作品に触れて、数の確認をした。収蔵棚から作品を取り出して、運ぶ際に作品を傷つけないための工夫も学んだ。また、一つ一つの作品のデータは数字やアルファベットを使用してデータ

ベースで管理されている。作品を貸し出すときの梱包作業も学芸員さんに丁寧に教えてもらいながら複数の工程を行った。複数の工程というのは、まず作品を薄葉紙で作品を梱包し、その上から気泡入り緩衝材で梱包をする。またその上からも少し厚めの堅い紙で梱包する。何十点もの作品を貸し出す時でもひとりで作業を行うこともあるようで作品を守るためには欠かせない一つ一つの工程があるのだ。

ポスターを収蔵する際には上からちょっとした重りを置いておかないと浮いてきてしまう。しかし重さのある重りを置くとポスターに型が付いたり変形させてしまう恐れがあるため、段ボールと薄葉紙で突っ張り棒のような重りを作成した。

最終日には、作品のコンディションチェックをさせてもらった。コンディションは作品を貸し出しする時に重要な作業であり、破れや欠損、汚れなどを細かく目をこらして見てゆく。万が一作品が返却された時に作品に新たな傷が加わっていれば、業者に頼んで修理してもらう。

研修を通しての感想

研修を通して大きく感じたことは、作品を守るための最善の環境作りがされているということだ。美術作品を後世に受け継いでいくことは容易なことではない。一つ一つの作品に作者が決めた世界にたった一つの色が使用されていたり、裏打ちや作品を描く紙などにも工夫がこらされている場合もある。いかに色あせないように、台紙が描かれた当初から変わらない状態にさせておくかがキーポイントなのである。そのため、作品管理倉庫内の温度と湿度は常に徹底管理されており、外の気候変化や温度変化の影響を受けない状態にされている。

また、この作品を守る環境作りに学芸員の方たちの力も大きく携わっている。作品の管理という点でたくさんの工夫がなされているのだ。一つでもミスがないように、作品の数を数えるときには何度も確認し、作品を梱包するときには万が一のことがないようにと何重にも梱包する。研修をさせてもらいながら学芸員さんと話をさせてもらい、いくつかの作業工程の中で注意すべき点を教えてもらったが驚くほど細かいところまで作品を守ることの徹底がなされているのである。作品と作品の間には必ず薄葉紙が挟まれていることもそのうちの一つの工夫である。

ある一つの時代に影響を与えた美術作品は必ず受け継がれるべきものである。そのような心を持って作品一つ一つを日々守り抜いている学芸員の仕事は、実際に研修に参加させてもらってなお魅力を感じた。自分自身もその作品を守るということに少しでも貢献できたと思うと、貴重な経験であった。